

## II-1.

### 「感動」から「感じる力」を培う教育を考える - 演奏活動のクラブへのアンケートのまとめおよび心理学的一考察 -

大谷正人（特別支援教育講座）・荒尾岳児（音楽教育講座）

#### はじめに

感性を育む上で、感動体験は感性や知性が統合され、象徴的に体験された事象として、重要な意味を持つと思われる。渡辺は感動について、「精神が衝撃を受けることだけが感動なのではなく、同時に対象への高い価値感情があり、その価値感情はなんらかの普遍的なものを志向することによって感動となる。」と述べている<sup>12)</sup>。この対象への高い価値感情と普遍的なものへの志向という、渡辺の指摘からもわかるように、共感・共有という感動の基盤がエネルギーともなり、感動は強い体験となり、高い志向性を持つが故に、感じる力や考える力を培う原動力にもなる。このように、感性と感動は、豊かな感性が感動を生み、感動が感性を培うというように双方向的な関係にある。

三重大学 COE(B)（通称 Kansei プロジェクト）では、教育における感性システムのフレームワークの創出を試み、その際、「内面的—表出的」、「形式的—暗黙的」、「個別的—共有的」という3つの分類軸があることを提案した<sup>9)</sup>。感動において、感性システムの3つの軸においては、共有的という点に特徴があり、対象への高い価値感情など、このフレームワークの次元を超えた特徴もあるように思われる。

感じる力を培う教育モデルを、教育の現場における感動体験という視点から考える場合、学生自身が主体的な立場から学びを創造し、子どもたちと共有できる有意義な体験ができる場として、教育学部における最大の体験は教育実習であろう。教育実習の場合、2週間または4週間という決められた期間に向けての準備、その期間の児童・生徒や教師との出会い、よりよい授業をめざしての研鑽など、様々な要素を通して、学生の感性・知性が教育の現場で子どもたちに対して最大限に発揮され、子どもたちの反応と相互に作用しあい、学生が感動を体験できる場となる。学生にとっては、日常を越えた場としての側面もある。

今回は、教育実習のような場ではなく、日常的にも感性を培える場としてのクラブ活動の持つ意義について、音楽系のクラブにアンケート調査をした。その調査結果もふまえて、感じる力を培う上で一つの視点として、感動のもつ意味、そして大学における感じる力を培う教育についても若干言及したい。

## I 感性と感動

### 1. 人間関係の中で「感じる力」を培う

人間関係の出発点は、人と人との出会いであるが、ブーバーは、「わたしとそれ」という関係は、空間と時間の制限の中だけで存在するのに対し、「わたしとあなた」という関係は、空間や時間を越えて成立するとして、以下のように述べている<sup>1)</sup>。

「根源語〈われ-なんじ〉は、ただ全存在をもって語り得るのみである。全存在への集中と融合は、

わたしの力によるのではないが、またわたしなしには生じ得ない。〈われ〉は〈なんじ〉と関係にはいることによって〈われ〉となる。〈われ〉となることによってわたしは〈なんじ〉と語りかけるようになる。すべての真の生とは出会いである。」

出会いが重要な役割をもつ心理臨床においては言うまでもないが、場の流れや雰囲気を感じることに、自分の心身の流れを感じることは、二人以上の集団での関わりにおいて重要である。特に、心理臨床の場においては、相手の気持ちを感じ、助力を求める心への感受性を活かしていくように心がけること自体がトレーニングになる<sup>5)</sup>。コミュニケーション障害の重い人を援助する体験は、神田橋が記しているように五感（視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚）トレーニングの最適の機会ともなる<sup>5)</sup>。

## 2. 感動の心理学的基盤

感動は、前述したように、知性と感性が高度に統合されて、体験されるものである。皆川が紹介しているように、知性は、知覚、記憶、表象、理解、推理、判断など認知的処理を含む知的精神活動感動であるのに対して、感性は、対象のもつ明確にはできない側面を直感的にとらえ処理する能力とも考えられる<sup>7)</sup>。感動に関連する心理学的概念として最も重要なのは、マズローの提唱した至高体験ではないだろうか。至高体験とは、最高の幸福と充実の瞬間であり、感動の一つの極みとも考えられる<sup>10)</sup>。この至高体験は、自己超越とも深く関連しており、マズローは、晩年に自己超越を自己実現よりもさらに高次元の人間の基本的欲求であるとした。至高体験の残存効果として、マズローは、以下の点を指摘している<sup>6)</sup>。

- ①至高体験は、厳密な意味で、症状をとり除くという治療効果をもつことができ、また事実もっている。
- ②人の自分についての見解を、健康な方向に変えることができる。
- ③他人についての見解や、かれらとの関係を、さまざまに変えることができる。
- ④多少永続的に、世界観なり、その一面なり、あるいはその部分なりを変えることができる。
- ⑤人間を解放して、創造性、自発性、表現力、個性をたかめることができる。
- ⑥人は、その経験を非常に重要で望ましい出来事として記憶し、それを繰り返そうとする。
- ⑦人生そのものが正当なものとされ、自殺や死の願望はそれほどあり得ないものとなる。

さらに、至高体験に関連が深い概念として、スピリチュアリティ（霊性）がある。ウィルバーによれば、スピリチュアリティとは、至高体験ないし意識の変容状態を前提とし、愛、信頼など、いわゆる精神的態度・姿勢である<sup>13)</sup>。

指揮者兼作曲家のフルトヴェングラーは、「人間的な感動の主要部分は、人間の内部にではなく、人と人之间にある。」と記していたが、感動には、普遍性、対象への高い価値感情、創造性、永続性などの特徴がある<sup>3)</sup>。このような感動体験が、さらに感性を高めるという効果を持つことは十分にあり得ることと思われる。

## 3. 脳科学の立場からみた感動

感動時の脳システムについて、茂木は脳科学の立場から、以下のように述べている<sup>8)</sup>。

「感動というのは、脳が記憶や感情のシステムを活性化させて、今まさに経験していることの意味を逃さずにつかんでおこうとする働きなのです。脳が全力を尽くして、今経験していることを記憶し

ておこうとしている。生きる指針を痕跡として残そうとしている。そのプロセスに感動があると言えるのです。」

福田は、彼の進化論的感情仮説から、知的感情、社会的感情、基本情動、原始情動という4つの情動・感情モジュールが協同して働くときに湧きあがるものが感動であると定義している<sup>2)</sup>。記憶と感情のシステムは、大脳の海馬や扁桃体が中心になって脳を支配しているが、感動の共有性という特徴を考えた時、その前提として他者との共感を生む回路の存在が重要となる。他者との共感を生む回路の一つとして、他者の心を理解する上で、前頭葉の運動前野にあるミラー・ニューロンの役割も注目されている。他者の運動を観察することで発火するニューロンは、上側頭溝でも発見され、ミラーシステムとして報告された<sup>11)</sup>。特に上側頭溝は、健常小児においてミラーシステムと心の理論に共通して関与する領域とされている。

主に左前頭葉の運動前野のミラーニューロンの存在している位置は、運動性言語野に一致している。感動は言語表現がなされることにより、より記憶され、永続的な価値を持つようになる。また感動体験の創造に関しては、実行機能を司る前頭前野の役割も大きいだろう。このように感動の脳科学的背景としては、特定の部位の重要性は指摘できるが、感動の背景として、知性と感性の統合されたものとしての性格を考えると、知性により関連の深い左脳、感性に関連が深い右脳の両者ともに脳全体として関与しているとも言えるだろう。

## II 感じる力を培う上でクラブ活動の持つ可能性

### - 演奏活動のクラブへのアンケートから -

「感じる力」を培うことを大学教育の場で考える時、大学では授業と課外活動という2つの活動に二分して考えることができる。課外活動では、学生自身が主体的に参加して共通の目的に向かって邁進するという意味で、課外活動には感性を高める可能性が十分にあると考えられる。特に芸術系の課外活動では、感じる力に直接関連した活動を日常的にしている。そこで今回、演奏活動をしているクラブに「感じる力」などに関するアンケートをとることによって、課外活動の持つ意味や可能性について考察した。

#### 1. 方法

##### 1) 対象

三重大学において音楽（演奏）活動（クラシック音楽の演奏が活動の中心）をしている2つのクラブ（A部とB部）にアンケートを行った。音楽系のクラブの中で、A部とB部にアンケートを依頼したのは、三重大学COEのKansei研究会のメンバーが、両部では顧問をしているためである。

##### 2) 内容

以下の内容からなっている。

- ①「感性」とは？
- ②感じる力を培うため、大学においてどのような活動が有意義か？
  - a. 授業（講義・演習・実験・実習などを含む）において
  - b. 授業以外の活動（クラブ活動や大学祭などを含む）において
- ③クラブ活動（サークル活動）は、感じる力を培うためにどの程度意義があるか？

④上記③で意義があると答えた人に対する設問

- a. クラブ活動（サークル活動）は、感じる力を培うためにどのような意義があるか？
- b. どのような時にその意義を認識したか？
- c. 感じる力を培うことに関して、クラブ活動（サークル活動）に独自の存在価値があるとすれば、それはどのようなものか？（あてはまるものすべてに回答）
  - ・感じたことを表現する力を伸ばせる
  - ・感性を共有できる
  - ・自発的・自主的に感性を伸ばせる
  - ・より継続的に感じる力を培える
  - ・感動体験が多い
  - ・その他

⑤上記の③で意義があまりないと答えた人に対して、その理由

⑥クラブ活動（サークル活動）の中で、感じる力を培うことに関する教員の役割

## 2. 結果と考察

A部では、19名に配布し、14部回収された（回収率74%）。B部では、41名に配布し、11部回収された（回収率27%）。回答者を学年別に分けると、1年生1人、2年生11人、3年生8人、4年生4人、大学院1年生1人であった。男女別では、男性10人、女声15人であった。また学部別に見ると、教育学部11人、工学部6人、人文学部5人、生物資源学部3人で、教育学部で音楽コースを専攻している学生はいなかった。

調査結果は、多い順に以下の内容にまとめられた（括弧内はその人数）。

### 1) 感性について

- ①事象（物事）に対して感じ、それをもとに新たに考え、活用することを司るもの（8）
- ②直感のように、論理的な思考をしない（できない）時に作動するもの（4）
- ③個人が独自に持っている感覚的なもの（3）
- ④ある程度生来のもので、経験によっても身に付くもの（2）

上記以外にも、「知識では補えない人間らしさを育て、美しく生きるために必要なもの」、「見聞きしたもの以外のことを感じとること」など、感性に価値評価をする力を認めているものが大部分であった。③の意見については、感性は知性と同じとする対立する意見もあった。

Kansei 研究班では、感性について、「価値判断を伴い方向性や能動性を持った総合的な働きである『感性』が『感じる力』の基盤であり、理論に裏付けされた実践や体験によって培われる」と考えており、この設問において、この考え方を紹介し感性についての概念を尋ねた<sup>9)</sup>。また、前述したように感性システムの位相として、「生み出す—受け取る」、「個別性—共有性」、「表現される—表現されない」という3つの軸があると考えているが、学生は「生み出す—受け取る」という感性の特徴を中心に考える傾向があった。

### 2) 感性を培うために有意義な活動

#### ①授業において

- ・実習・演習などの体験型授業 (6)
- ・様々なことを学び、経験すること (4)
- ・考えさせる討論中心の授業 (3)
- ・問題解決型の授業 (2)
- ・芸術関連の講義・実習 (2)

## ②課外活動において

- ・人と関わり、コミュニケーションをとること (4)
- ・様々な経験を積み重ねること (3)
- ・よい音楽・絵画などの鑑賞をすること (3)
- ・責任を持ち、運営などに関わること (2)

上記以外にも、「発表の機会を持ち、社会に貢献すること」などもあった。いずれにおいても、経験を重ねることや人と関わるのが、感性を培う上で重要と考えていた。

## 3) クラブ活動(サークル活動)は、感じる力を培うためにどの程度意義があるか?

A部とB部では回収率がかなり異なるために、同列に論じることはできないと考えられる。そこで、別々にアンケートを集計した。

A部では、「非常に意義がある」との回答は、14人中8人(57%)で、内訳は、男子4人、女子4人、また学年別では、2年生2人、3年生4人、4年生1人、大学院生1人であった。「ある程度意義がある」との回答は、14人中6人(43%)で、その内訳は、男子3人、女子3人で、学年別では1年生1人、2年生3人、4年生2人であった。

B部では、「非常に意義がある」との回答は、11人中8人(73%)で、内訳は、男子3人、女子5人で、学年別では、2年生3人、3年生4人、4年生1人であった。「ある程度意義がある」との回答は、11人中3人(27%)で、内訳は、女子3人で、すべて2年生であった。

A部、B部ともに。「あまり意義がない」、「全く意義がない」という回答は、全くなかった。また回答した3年生8人は、全員が「非常に意義がある」と回答した。

B部においては、アンケートの回収率が27%とかなり低かったため、データの信頼性に問題は残ったが、感じる力を培うことに関して、クラブ活動は大きな役割を果たしていることが推測された。特にクラブの運営などを最も中心的に担当している3年生では、その傾向は顕著であった。

## 4) 感じる力を培うことにおけるクラブ活動の意義

### ①どのような意義か?

- ・様々な人々と交流でき、様々な世界に触れて、多様な経験ができる (12)
- ・音楽に対する理解が深まり、自分自身の中で音楽の占める割合がふえる (4)
- ・普段のキャンパスライフでは学びきれないことを学ぶことができる (2)
- ・自主的・積極的に活動できるので、敏感に情報や人の働きかけを受け取れる (2)

他に「自己表現が容易になる」などもあった。

### ②どのような時に認識しますか?

- ・人と話し合ったり、コミュニケーションをとる時 (6)
- ・定期演奏会など特別な行事の時 (4)
- ・すべての時 (3)

- ・曲の練習をしている時 (3)
- ・以前と違ったものの見方を感じた時 (2)
- ・音楽を通していろいろな文化に触れられた時 (2)

他に「一つの目標に向かって動いている時」や、「一つの集団を預かった時」のような意見もあった。2の質問の回答と共通点が多かったが、音楽クラブ特有の回答も多くみられた。

### ③クラブ活動のもつ独自の意義

この設問では、該当する答えすべてに○をするという形式で尋ねた。下記の設問の右側に、矢印で25人中何人が○をしたかを回答の多い順に記した(括弧内はその%)。A部とB部の間、また学年の間で有意な差はなかった。

- ・感じたことを表現する力を伸ばせる。→19/25 (76%)
- ・感性を共有できる。→16/25 (64%)
- ・自発的・自主的に感性を伸ばせる。→14/25 (56%)
- ・感動体験が多い。→13/25 (52%)
- ・より継続的に感じる力を培える。→8/25 (32%)

その他の自由記述の欄では、「恥ずかしがらずに素直に表現できる体験ができる」、「実体験ができる」、「人間性の違いに感動する」という意見があった。

以上のように、感じる力を培う上で、クラブ活動で学生が最も大切にしているのは、人々との共同体験であり、音楽系というクラブの特徴としては、表現力の向上であった。「共有性」、「表現する」という感性の位相については、過半数の学生がクラブ活動独自の意義と考えていた。

### 5) 感じる力を培うことに関して、クラブ活動があまり意義がない場合の理由

この問いに該当する回答は全くなかった。

### 6) クラブ活動で「感じる力」を培うことに関して、教員の果たしうる役割

- ・学生と同じ視点にたち、共に培う (6)
- ・学生の考え方ややりたいことに対して、方向性を示唆するアドバイザー (6)
- ・より専門家としての助言や指導 (6)
- ・よい音楽に出会うきっかけや刺激を与える (4)

全体的に、教員には何らかの支援を期待する意見が多く、「放っておく」という意見は一人だけであった。専門的なアドバイスを求める学生と、学生と同じ視点に立ち、共に感じる力を発展させることを求める学生の両群が認められた。

## III 感じる力を培う教育と感動

先の、感じる力を培うことに対するクラブ活動の効果に対するアンケート調査からは、音楽系クラブ活動に属している学生は、感じる力を培う上で、クラブ活動そのものに大きな意義を認めていることが確認された。クラブ独自の意義として、感動体験が多いという回答も過半数の回答者であった。感性システムのフレームワークにおいては、「表現する」「共有する」という面については、独自の意義があることが確認された。また、クラブ活動で感じる力を培うことに関して、教員にも何らかの支援を期待する意見が大部分であった。

人間にアクションを仕掛け、その活動に変化を生み出すアクション・リサーチ、そして現実のフィールドで行われる解決志向型の方法が、感じる力を培うことに対して有効であることについては、本プロジェクトのこれまでの研究で検討してきた<sup>4)</sup>。アンケート調査においては、学生自身も体験型授業が感性を培うために有意義と考える傾向があった。

感動の体験は、感性を培う上でも重要であり、特に共有するという面において特徴がある。今回のアンケート調査の対象となった学生のクラブ活動も、ともに演奏活動をするという点において、まさに感性を培う割合の高いクラブであるが、学生が主体的に取り組む活動であり、そこではまさに共同体験やコミュニケーションが大きな役割を占める。教員が関わり、ともに感動体験を創造し得るという点においても、感性を培う教育モデルに何らかの示唆を与えることができると思われる。

感動の究極の姿とも考えられる至高体験が、精神性や価値観に関わることが多いこと、また感動が感性を豊かにし、創造性、自発性を高める効果があることを考えた時、個別的・共有的という感性システムの軸は、独自の意味を持っている。学生の創造的体験を取り入れた教育において、個別性を十分に尊重しつつ共有性への視点をもつことは、教育モデルを考える上でも一つの方向性として有意義ではないだろうか。

#### <参考文献>

- 1) Buber, M.: Ich und Du. 1923 (植田重雄訳:『我と汝』岩波書店、1979)
- 2) 福田正治:『感じる情動・学ぶ感情 感情学序説』ナカニシヤ出版、2006
- 3) Furtwangler, W.: Vermachtnis. F. A. Brockhaus, Wiesbaden, 1956. (芦津丈夫訳:『フルトヴェングラー 音楽ノート』白水社、1988).
- 4) 廣岡秀一、松本金矢:「アクション・リサーチ」、国立大学法人三重大学教育学部“Kansei プロジェクト”編、『感性システムの構造化とそれを基盤としたアクションリサーチ的アプローチの可能性の探求 ～「感じる力」を培う教育モデルの開発にむけて～ 平成16年度活動報告書』pp47-50, 2005
- 5) 神田橋條治:『精神療法面接のコツ』岩崎学術出版社、1990
- 6) Maslow, A. H.: Toward a Psychology of Being (Second Edition). Van Nostrand Reinhold Company, Inc. 1968 (上田吉一訳:『完全なる人間〔第2版〕:魂のめざすもの』誠信書房、1998)
- 7) 皆川直凡:「知性と感性を結ぶ教育に対する認知心理学的アプローチの系譜」、鳴門教育大学研究紀要、17: 17-25, 2002
- 8) 茂木健一郎:『感動する脳』、PHP研究所、2007
- 9) 根津知佳子、森脇健夫、松本金矢:「子どもたちの“感性”を可視化する」、日本感性工学会感性哲学部会編『感性哲学6』pp108-119、東信堂、2006
- 10) 大谷正人:「マーラーの交響曲第8番の志向する超越性 - 心理臨床からの視点も含めて -」、三重大学教育学部研究紀要、57: 41-48, 2006
- 11) 大西隆:「自閉症スペクトラムとミラーニューロン」、宇野彰編著『ことばとこころの発達と障害』pp287-288, 永井書店、2007
- 12) 渡辺護:芸術学〔改訂版〕、東京大学出版会、1983
- 13) Wilber, K.: The Eye of Spirit: An Integral Vision for a World Gone Slightly Mad. Shambhala Publications, Inc., 1997. (松永太郎訳:『統合心理学への道:「知」の眼から「観想」の眼へ』春秋社、2004)